

【核武装した】日本国召喚

スカイキッド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、日本国が核兵器を所有し、それを躊躇なく異世界で使用したら、という作品です。

※注意

この作品の日本は、核兵器が戦場で躊躇なく使われてきた世界の日本であり、現実の日本及び団体や人物、その他国家や集団とは全く関係がありません。また、人によつては相当な不快感を覚えかねない内容だと思しますので、閲覧にはご注意ください。

目次

プロローグ：ロデニウス大海戦	1
日本が核武装した経緯（設定）	4
エジエイ防衛戦、または核攻勢	10

プロローグ：ロデニウス大海戦

中央暦1639年 4月25日

ロデニウス大陸 北部沖合い

その日、ロデニウス大陸沖のロウリア王国北部海上で行われた「ロデニウス沖大海戦」で、4発の核爆弾が爆発した。

爆心地と化したのは、クワトイネ公国のマイハーク港を攻略すべく、同地に向けて進撃するロウリア王国東方征伐艦隊——4,400隻の木造帆船で構成された艦隊のど真ん中だった。

投下されたのは、日本国航空自衛隊の所有するB61熱核弾頭——重量300キロ、全長3.5メートル、全幅30センチ程度であり、その核出力は170キロトン、1945年8月6日に広島で世界で初めて実戦使用された核兵器「リトルボーイ」11.3個分のエネルギー、それが4発であった。

それぞれのB61熱核弾頭は、空自に所属する4機のF-2A戦闘機から1発ずつ投下され、艦隊上空の高度500メートル地点にて炸裂した。

まず最初に核爆発によって飛び出したのは、放射線だった。核分裂により生じた放射線は、爆心地付近にいた人間——要するにロウリア艦隊の水兵を即死させるには十分すぎる量、致死量だった。この時点で、仮に弾頭が炸裂せず、熱線や爆風の影響がなかったとしても、爆心地付近の水兵は助からなかっただろう。

続いて100万分の1秒後には、中心の温度が250万℃に到達する超高温の火球が形成され、熱線を外部に放出しつつ急速に温度を下げながら膨張、この頃からガンマ線が大量に放出されることで空気が反応して紫色に見えるようになり、約1.7秒後には、あの禍々しいキノコ雲が形成された。

放出された膨大な熱線は、爆心地付近にいた多数の木造帆船を一瞬にして発火させ、多くのロウリア水兵らの皮膚に重度の火傷を負わせ

た。

さらに遅れて発生した巨大な衝撃波は、爆心地から数キロ離れた場所にいた帆船のマストや船体を破壊し、中には一瞬にして船そのものを衝撃波だけで完全に粉碎されたものもあった。

熱線や衝撃波は一瞬にして全てが照射されしきったが、爆発により生じたガンマ線や中性子線は、さらに数時間以上経っても照射され続けた。

そして爆心地付近にいた全ての生物——船上にいた兵士はもちろん、海中の魚も含めすべて——の身体へ、生体活動に影響を与えかねない致命的な量のそれを与え、彼らの身体を蝕んだ。

やがて一拍置いて、ようやくロウリア水兵らは立ち上る巨大な4つのキノコ雲を目にした。

この瞬間だけで4、400隻いた木造帆船の中で浮いていられたのは600隻弱、満足に活動できるのは150隻弱にまで減らされており、生存者は約16万人の水兵のなかで、2万人弱しか残っていなかった。この時点で指揮官の海将シャークンも蒸発していた。

そして生き残った彼らも、放射線と熱線による重度の火傷により、もう長くないことは明らかだった。

もはやこの時点でマイハーク港への進撃は中止されていた。やがて日没となり、放射性降下物を含んだ黒い雨が彼らの頭の上に降り注ぎ始めた。

その頃にはもう5、000人程度しか生きていなかった。放射線による生体活動への影響と、皮膚への重度な火傷による脱水は、医薬品も治療魔法の使える魔導師も少なく、さらに食料も綺麗な水もほんの少ししかない船上で、彼らは助けを求めながら次々に息絶えていった。

喉の渇きに耐えられなくなった者の中には、口を開けて空を仰ぎ、黒い雨を飲もうとする人間もいた。やがて彼らはそのまま動かなくなつた。

そのうちに生き残っていた者も次々に生命活動を停止していき、船員の不足によって活動可能なロウリア艦隊の帆船も、ロウリア本国へ

の帰還が可能な帆船も、この時点では一隻も残っていないかった。

翌日、ロデニウス大陸の沖合いには大量の水死体や、生きた船員のいない多数の帆船が流れ着いた。

それらの死体は、全身の露出した皮膚が焼けただれたり、水ぶくれを起こしたり、肉を垂れ落とすなど、どれも奇妙な死に方であった。

異世界の人々にとって初めてとなる、科学的に引き起こされた核爆発による攻撃の成果は、同時に大惨禍を引き起こす結果となった。

日本が核武装した経緯（設定）

◆「西部日報」が報じた、戦後世界における世界各地での核兵器使用の歴史

1951年4月12日 西部日報

『マッカーサー元帥、大陸中国に原爆投下。』

11日午前2時頃、米軍は北鮮（北朝鮮）との国境付近にある満州地方の大陸中国軍基地に原子爆弾3発を投下したことを発表した。

この朝鮮戦争で最初の、人類史では三回目の原子爆弾使用が、同時にGHQ総司令官職を解任されたマッカーサー元帥の独断の命令によるものであると米軍は説明している。

米国はマッカーサーの更迭および軍法会議の開催を表明したものの、この攻撃に大陸中国は抗議声明を発表した。また、ソ連は大陸中国と北鮮へ原爆を供与すると発表している。』

1951年4月19日 西部日報

『北鮮軍、ソウルへ原爆投下。』

米国は18日午前9時頃、韓国都市ソウルが北鮮軍爆撃機による原爆攻撃を受けたことを発表した。

現在未確認ながら死傷者数は2万人以上に上ると発表しており、これが先日のマッカーサー元帥による原爆攻撃への報復であることは明白である。

なお、マッカーサーは昨17日に米本土に帰国しており、もう間もなく軍法会議が開かれる予定である。』

1953年7月27日 西部日報

『休戦協定、けき調印。』

27日午前8時、国連軍総司令官と北鮮軍最高司令官および中国志願軍司令員の間に休戦協定が結ばれた。

更迭されたマッカーサーによる2年前の原爆攻撃以後、今日までに両軍合わせ35発の原子爆弾が使用されたとされており、朝鮮半島は全土が荒廃したほか汚染が激しく、復興には相当の時間が掛かると考えられている。

西日本における放射性降下物の土壌汚染もあと数年は続くと思われる』

1958年9月1日 西部日報

『台湾海峡、核の報復戦激化。』

8月23日から始まった中華民国（台湾）と大陸中国の衝突により始まった第二次台湾海峡危機は、24日の米軍による核兵器を用いた介入以後激化の一途にある。

すでに一連の戦闘にて両軍合わせ11発の核兵器が使用（大陸中国はソ連から供与されていたものを使用）されたとしており、米軍は新型の水素爆弾も投入したほか、沖縄からも核を載せたB-47戦略爆撃機が何機も往復している。』

1961年4月16日 西部日報

『キューバにて核爆発。』

15日朝6時、キューバ軍基地の飛行場にて核爆発が起きた。

核兵器の使用が確実視されているほか、核爆弾を投下したのは米空軍のダグラスA-26爆撃機と見られているが、米軍は関与を否定している。

この件に関し、キューバ外相のラウル・ロアはニューヨーク国連本部で「アメリカの仕業」として非難している。』

※この翌日、俗に言うピッグス湾事件が勃発。戦術核兵器も使用され、キューバの社会主義政権であるカストロ政権は崩壊する。

1967年11月5日 西部日報

『防衛庁、自衛隊への核配備を決定。』

3日、防衛庁は陸海空自衛隊共用で200発の戦術級核兵器を保有

することを発表した。政府は米国からの核兵器購入を希望してる他、すでに米国議会は日本への核供与を承認している。

この発表を受けて首都圏では学生運動や過激化したデモ、暴徒と機動隊との衝突が続発しており、政府は治安出動を命令、習志野の陸自第一空挺団からも人員が派遣されている。』

1973年10月9日 西部日報

『アラブ諸国が核兵器を使用。』

昨8日、イスラエル軍はゴラン高原にて、アラブ諸国軍が戦術核兵器を投入したことを発表した。

今回の攻撃によりイスラエル軍は大規模な撤退を余儀なくされたほか、今回使用されたアラブの核がソ連から供与を受けたものであると推測しており、米国への支援を要請している。

この第四次中東戦争によるオイルショックの回復はまだ少しかかるものと見られる。』

1975年4月31日 西部日報

『泥沼のベトナム戦争、ついに終幕。』

ついに泥沼と化したベトナム戦争が終結する。米国大統領は60日以内にベトナム全土からの完全撤兵を約束し、また周辺の4か国に監視団を派遣するとも表明した。

(中略)

米国は北ベトナムに対して戦術核兵器を15発使用したとされているほか、枯葉剤の使用などで全土が汚染され、ベトナムの復興には相当な時間を要すると考えられる。』

1976年9月12日 西部日報

『函館に核攻撃、ソ連の仕業か。』

11日、函館空港がソ連軍潜水艦の発射したとみられる核搭載巡航ミサイルで核攻撃を受けた。

防衛庁は、米国に亡命するため飛来したソ連防空軍中尉のミグ25

戦闘機を、ソ連が日本や米国により機体解析される前に破壊するための攻撃と見ている。

この件に関し、日本政府はソ連に抗議声明を発表すると共に、問題を国連にて追及する予定である。』

1982年5月31日 西部日報

『アルゼンチン、英巡洋艦に核攻撃。

昨30日午後6時、フォークランド紛争に出撃していた英国海軍のヘリ搭載巡洋艦「タイガー」がアルゼンチン軍のA-4スカイホーク攻撃機による核攻撃を受けて撃沈された。

現在のところ生存者は確認されておらず、またどのような経路でアルゼンチンが核を入手したのかは不明である。』

1987年11月25日 西部日報

『ソ連軍、アフガニスタンで核兵器使用。

11月23日未明、アフガニスタンに侵攻したソ連軍は、ゲリラ勢力拠点の一掃を目的にサスカンダフ峠を核攻撃した。

使用されたのはメガトン級の戦略核と見られていて、アフガンのみならず周辺国への放射性降下物による被害も心配される。』

1991年2月10日 西部日報

『多国籍軍がイラクを核攻撃。

先月29日のイラク軍による米海軍空母「ミッドウェイ」への核攻撃に対する報復として、多国籍軍は昨日イラク南部にある複数の軍事施設を戦術級・戦略級核兵器で核攻撃した。

使用された核爆弾は6発と見られている。

なお、今日に至るまでイラクが核兵器を入手した経路は不明である。』

1999年4月14日 西部日報

『ユーゴスラビアで核爆発か。

先日13日、NATOはユーゴスラビアにて3回目となる核兵器の使用が行われたと発表した。旧ソ連より流出した核兵器が使用されたと見られるケースは、今回にて45回目である。

また一部情報筋によると、核爆発により巻き上げられた大量の粉塵が太陽光線を阻害しており、地球寒冷化が急速に進みつつあるとのこと。』

2003年5月2日 西部日報

『米国、イラクでの戦闘終結を宣言。』

ホワイトハウスは昨日、イラク戦争における全ての大規模戦闘が終結したと宣言した。

イラクの保持する大量破壊兵器の撤廃を理由に始まったこの戦争だが、両軍合わせ14発の核兵器が使用された。うち大半はイラク軍による国内での核兵器使用である。

米国はイラクでの大量破壊兵器を全て処理するまで進駐を続けるとのことだ。』

2008年3月31日 西部日報

『防衛省、戦略潜水艦の建造開始。』

昨日、防衛省は海上自衛隊の新型潜水艦として、SLBM（潜水艦発射型弾道ミサイル）の垂直発射管を備えた戦略潜水艦の建造を開始したと発表した。

今までの海自では魚雷発射管と、それを用いて射出するタイプの核魚雷・核巡航ミサイルを使用しており、今回のようなSLBMと垂直発射管の採用は本級が初である。』

2010年11月24日 西部日報

『北朝鮮が韓国を核攻撃。』

昨23日、北朝鮮は韓国の延坪島を核攻撃した。韓国軍は核搭載の玄武1型弾道ミサイルで反撃を行っており、朝鮮半島での本格的な武力衝突は去年の大青海戦以来、核が使用された戦闘は朝鮮戦争以来と

なる。

韓国国防部は今回の戦闘による死傷者数を約2,800人と発表しており、また今回の戦闘で延坪島は7割が消失したとされる。』

2013年7月25日 西部日報

『地球寒冷化、世界各地で深刻化。』

先ほど世界気象機関(WMO)は地球寒冷化が世界各地で深刻となっていることを発表した。

同時にWMOは、世界各地での紛争で核兵器が使用されたことにより大量の粉塵が巻き上げられ、太陽光線を阻害していることが原因としている。

おととい東京では今年の夏で過去もつとも低い最高気温を観測しており、またこの先数年は冷夏と厳冬が続く可能性がある」と気象庁は発表している。』

エジエイ防衛戦、または核攻勢

中央暦1639年 7月26日

クワトイネ公国 城塞都市エジエイ

この異世界で初めて純科学製の核兵器が使用されたロデニウス沖大海戦から3か月後、つぎに核爆弾がこの世界で炸裂したのはクワトイネ公国内での事だった。

場所はエジエイ近郊——エジエイはロウリア王国侵攻に備えて作りだされた城塞都市で、街そのものが高さ25メートルの城壁に守られており、また公国軍の兵士約3万人が駐屯している、まさに鉄壁である。

クワトイネ公国へと陸上侵攻し、国境付近の都市ギムを攻め落とし、ロウリア王国軍——総数50万人の兵士のうち、2万人の兵士からなるエジエイ攻略先遣隊が、エジエイの西5キロ地点にまで進出していた。

エジエイに控えるクワトイネ公国軍の兵士らは皆がみな練度が高く、ロウリア軍との戦闘に備え、日々身体や精神を鍛練し、努力し続けてきた。

陸上自衛隊第7師団に所属するM110自走203ミリ榴弾砲がロウリア王国軍に向けて放った8インチ熱核砲弾は、そんな彼らの努力をロウリア軍先遣部隊の兵士約2万人ごと一瞬にして消し去った。

UH-60JAヘリコプターより2時間以内に撤収するよう勧告する紙をロウリア軍にばら蒔いた陸上自衛隊は、2時間経っても撤収しないことを受けてついに彼らに対する攻撃を行った。

陸自第7師団第7特科連隊に所属するM110自走203ミリ榴弾砲が観測射のちロウリア軍に向けてエジエイ後方の基地敷地内より発射したのは、米国より自衛隊へ供与されていたW79熱核砲弾だった。

W79は203ミリ口径の砲から発射することを考慮し、重量約9

0キログラム、直径約20センチ、全長約1メートルにまでサイズを抑えられたため、核出力は1キロトン——広島に落とされた「リトルボーイ」のわずか15分の1程度でしかなく、かなり小さい。

しかしW79は、核爆発の際のエネルギー放出における中性子線の割合を高め、爆風による建造物への被害よりも中性子線による生物への殺傷力を高めたものであり——俗に言う、「中性子爆弾」である。

そのため、エジエイの西5キロの位置に発生したキノコ雲はロデニウス沖大海戦の時間におけるそれよりも小さかったが、密集した2万人の兵士を全滅させるには十分だった。

砲弾がロウリア軍の上空にて炸裂した瞬間に飛び出してきた、炸裂地点から半径1キロ以内にいた全ての生物を一瞬で絶命させうるほど高濃度の放射線は、この瞬間だけで大半のロウリア兵を昏倒させた。

約100万分の1秒後にはやはり高温の熱球が出現し、熱線を放出しつつ温度を急速に下げて膨張すると、約1.5秒後にはキノコ雲が発生。

W79のような「中性子爆弾」は通常の核兵器よりも熱線・爆風が抑えられているが、それとて半径400メートル以内にいたロウリア兵を死体も残さぬ高温で蒸発させるには十分なものだった。

爆発から10秒もしたころには、ほとんどのロウリア兵が放射線により何が起きたか分かることもなく一瞬に逝っていった。運悪く砲弾の真下にいたために蒸発したか、またはあと1日もすれば絶命しかねない致命的な放射線障害を負った。生存者は1,000人にも満たなかった。もちろん彼らの命日は、恐ろしいほど近くにまで迫っている。

このロウリア軍2万人を率いていた指揮官のジューンフィルア伯爵、その副官を務める魔導師のワツシューナらは、すでに多量の放射線を浴びたことで絶命していた。

1発の砲弾が、一瞬にして約2万弱の兵士を吹き飛ばしたのだ。

不幸中の幸いとして、中性子爆弾として作られたW79はその設計上、放射性物質が残留しにくいように設計されており、ロデニウス沖

にて見られた放射性物質を含む「黒い雨」の降雨は発生せず、周辺の放射能汚染も最低限のものとなった。

このときの攻撃は当事者のロウリア軍、そして自衛隊のみならず、他にも幾つかの人間によって見られている。

それは例えばエージェイにて防戦の準備をしていたクワトイネ公国軍だったり、その指揮官のノウ將軍であったり、ギムの住民であったり——彼らは事前に自衛隊が核攻撃を行うことが通達されていたため軍用の放射線防護ゴーグルが支給されていた——またはロウリア軍の蛮行から逃れるべくギムを目指していた住民たちであった。

彼らの中でも博識のあった者は、後にこのときの光景をこのように語っている。

——それはまるで、伝承にて古代魔法帝国ラヴァーナが使用したと言い伝えられている最終兵器「コア魔法」が使用されたのでは、と疑うような光景だった。そしてそれは、あながち間違いではなかった。

——違いがあるとすればそれは、どこの国が使用したか、ただそれだけだった。